

核の今が わかる本

共同通信編集委員

太田昌克

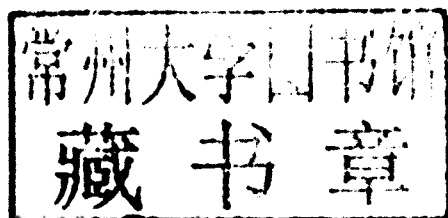
共同通信核取材班



講談社+α新書
プラスアルファ

八田白元

共同通信核取材班



「核のう」がわかる本

太田昌克

1968年生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、政策研究大学院大学博士課程修了、博士(政策研究)。1992年、共同通信社入社。広島支局、外信部、政治部などを経て、2003年より2007年まで、同社ワシントン特派員。核密約問題など日米関係の裏面史を掘り下げた取材活動により2006年度ボーン・上田記念国際記者賞、第15回平和・協同ジャーナリスト基金賞(2009年)を受賞。著書には「アトミック・ゴースト」(講談社)、「731免責の系譜」「盟約の闇」(以上、日本評論社)などがある。

講談社  新書 570-1 C



「核の今」がわかる本

おお た まさかつ
太田昌克 ©Masakatsu Ohta 2011
きょうどうつうしん かく しめ ざいほん
共同通信核取材班 ©kyodo News 2011

2011年7月20日第1刷発行

- 発行者——— 鈴木 哲
発行所——— 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部(03)5395-3532
販売部(03)5395-5817
業務部(03)5395-3615
- 写真——— 共同通信社
デザイン——— 鈴木成一デザイン室
カバー印刷——— 共同印刷株式会社
印刷——— 慶昌堂印刷株式会社
製本——— 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

Printed in Japan

ISBN978-4-06-272722-8

●目次

はじめに 3

第一章 「第二次核時代」に揺れる地球

広島原爆ウラン製造の施設は今 15

「核の遺産」で先端研究 カザフ 17

揺れと音で北朝鮮核実験を監視 21

事故後三〇年のスリーマイル 24

抑止力誇示する東海村のプロ 27

放射性廃液処理まで一世紀 米 29

第二章 放置されるヒバクシャたち

核の棄民、憤怒の半世紀 仏 35

それでも原子力 チェルノブイリ 38

第三章 「原子カルネサンス」の底流

封印されるイラクのウラン被害 40
見放されたロシア原潜爆発 43

米印ウラン村で相次ぐ「がん」 45
国際政治に影響を与える被爆者 48

イランの核にらむ湾岸諸国 55

韓国の原発輸出戦略 62

燃料サイクル 日本の野心 57

「民生用」に潜む抜け道 印 65

核燃料バンクに反発する途上国 59

核解体で協力する日米露 67

第四章 戦慄の核セキュリティー

四人の暴漢が難なく突破 南ア 73

脅威の芽摘む米の特殊作戦 81

オバマが監視する「緩い核」 75

「指紋」が切り札の核鑑識 83

核テロの「震源地」パキスタン 78

核テロに鈍感な日本 86

第五章 核の結節点——「闇市場」と被爆国

特殊磁石輸出した日本商社 91

闇市に蠢く精密機器メーカー 93

起点は第二次大戦に 95

カーン博士と日本つないだ政商 97

リビア、イラン、北朝鮮も 99

第六章 NPT（核拡散防止条約）揺さぶる懸念国

イラン支える密売網 103

軟着陸つぶした強硬派 105

核の源流、半世紀前に 北朝鮮 108

密約で例外のイスラエル 110

国家ぐるみで核拡散 パキスタン 113

根深い米欧への不信 116

第七章 押せないボタン——ホワイトハウス黙示録

湾岸戦争 実用性失った「最終手段」 123

ベトナム戦争 「人種」が壁に 125

キューバ危機で「核のタブー」確立 128
第四次中東戦争 核戦争への梯子 130

第八章 「核の傘」の源流を追う

幻の日本核貯蔵構想 135

常態化した核持ち込み 137

沖縄核密約 四〇年後の証言 140
日本はかくして核依存となる 142

第九章 「核なき世界」への胎動

「核廃絶」の原点 149

理想と現実が共存 バラク・オバマ 151

暗躍する「抵抗勢力」 154

漂流に歯止め 核と日米同盟 156
「9・11」が呼び起こした夢 159

第二〇章 核廃絶への道程

色濃い影落とす米内政の分断 165

危機意識をめぐる米中の溝 167

NATO、玉虫色の新戦略 169

定まらない日本の「非核」 172

地平に見え始めた「核なき世界」 174

「核問題」用語集 178

おわりに 196

八田白元
共同通信核取材班

「核の今」がわかる本

講談社  新書
アルファ

はじめに

正月の松も取れない二〇〇九年の年明けだった。共同通信社イスラマバード支局の遠藤幹宜^{のぶ}支局長から届いた一通のメールが、ほろ酔い気分ののどかな正月ムードを完全に吹き飛ばしてくれた。

パキスタンの「核開発の父」、A・Q・カーン博士が核開発に必要な資機材を調達する目的で、一九七〇年代から日本企業と取り引きを秘密裏に重ねていたとする博士自身の証言内容がメールに記されていた。思わず息をのむビッグニュースである。

ただ、博士は北朝鮮やイランなどに核兵器技術を売り渡した核拡散の「闇商人」であり、パキスタン当局によつて軟禁状態にも置かれた要注意人物である。早速上司と相談の上、共同通信外信部内に若手記者を中心とした取材班を組んだ。博士の証言を裏づけるには、日本側関係者を洗い出し、所在を突き止めて、取材攻勢をかける必要があるからだ。

つづれた会社の閉鎖謄本の取得に始まる地道な調査取材には四〇日を要した。そしてカーン博士やその部下と当時直接やり取りした一人の日本側関係者に行き当たったことが、ブレ

ークスルーとなり、遠心分離機に不可欠な特殊磁石などが日本の企業から供給されていたという新たな事実を突き止めた。博士を扇の要かなめとした「核の闇市場」に、被爆国日本が深く関与していたのである。

この年は、人類の歴史に根本的な変化をもたらした「核」という問題を考えるに当たり、大きな節目の年だった。一月二〇日に米国史上初めて黒人として大統領に就任したバラク・オバマは四月五日、チェコの首都プラハで演説を行い、「核兵器を使用したことがある唯一の国として、米国には道義的な責任がある」と言明、「核なき世界の平和と安全」を追求していくと世界に宣言した。ちょうどこの日、金正日体制下の北朝鮮は「テポドン2号」の技術を利用した長距離弾道ミサイルの発射を強行、五月には二回目の核実験に踏み切った。北朝鮮と並んで核技術開発に邁進まいしんする中東のイスラム大国、イランによる核技術開発の進展も国際社会の懸念けんねんを増幅した。

日本では九月に憲政史上画期的な政権交代が実現し、鳩山由紀夫はとやまゆきお率いる民主党を中心とした新政権が発足した。そして鳩山新政権が真っ先に着手したのが、日米核密約の解明だった。この密約調査は、共同通信が五月末に報じた、核密約に関する四人の外務事務次官経験者の証言に端を発していた。長年、米軍による「核持ち込み」を疑ってきた日本国民は、米

軍核搭載艦船の寄港容認という核密約によって担保されていた「核の傘」の問題に向き合うことになった。そして長年の「国家のウソ」が半世紀を経て暴かれた^{あば}。

こうした核をめぐる「変化」が顕在化した二〇〇九年以降、カーン博士と被爆国の隠された「結節点」をあぶり出した取材班は、核の現代史の深層をさらに掘り起こし、人類史における核の持つ根源的な意味を考究しようと、日本と世界を舞台に取材活動を精力的に進めた。

オバマ大統領はじめ世界の政治指導者が「冷戦後の最大の脅威」と位置づける核テロを阻止する最前線の取り組みや、核拡散防止条約（NPT）を揺さぶる北朝鮮やイランなど懸念国の不穏な動き、地球温暖化とエネルギー需要増大などで多数の国が原子力発電へと舵^{かじ}を切った「原子力ルネサンス」の内幕、「核なき世界」を志向する勢力と核抑止論を盾にこれを拒否する「抵抗勢力」との対峙^{たいじ}や確執、広島や長崎の被爆者も含めた世界のヒバクシャの現況、ナガサキ以来、政治指導者が「核のボタン」を押せなかった歴史的背景、さらに日本の歴代政権が信奉してきた「核の傘」の歴史的な形成過程……。

核をめぐる多くの問いからテーマを抽出し、核時代の知られざる真相の発掘に力点を置いた取材班の活動現場は、共同通信社が世界に派遣する特派員の多大な協力も得ながら、全世

界約二〇カ国に広がった。そして二〇〇九年六月から二〇カ月間、計一二部（各部五回程）の企画検証記事を「核なき世界——人類の岐路」のタイトルシリーズで、共同通信に加盟する日本全国の新聞社に配信、二〇紙近い掲載を得た。

本著は、こうした核をめぐる調査報道の軌跡をまとめた集大成である。新聞記事が配信された時点から状況に若干の変化が見られるため、本著の刊行に際しては最新データを新たに盛り込んだり、部分的に現況を加筆したりした。また本著の最後には核問題をめぐる用語集をつけた。辞書代わりにご利用いただければ幸いである。なお本文中では多くの場合、敬称を省略させていただいた。登場人物の年齢や肩書き、為替レートについては、取材当時のものを記載した。ご理解賜りたい。

本著の編集・推敲^{すいこう}作業を進める過程で、東日本大震災が日本を襲った。そして東京電力福島第一原発の事故は被爆国日本のみならず全世界に対し、現代社会が避けて通れない重大な問いをあらためて突きつけた。

人類は核のパワーと共存していけるのか。

本著が「核の今」に関する知見を深め、この重大な問いに対する「解」を導き出す一助となることを心より願う。それが取材班の総意であり、読者の皆さまへのメッセージである。

取材班を代表して

共同通信編集委員

おおた まさかつ
太田昌克

●目次

はじめに 3

第一章 「第二次核時代」に揺れる地球

広島原爆ウラン製造の施設は今 15

「核の遺産」で先端研究 カザフ 17

揺れと音で北朝鮮核実験を監視 21

事故後三〇年のスリーマイル 24

抑止力誇示する東海村のプロ 27

放射性廃液処理まで一世紀 米 29

第二章 放置されるヒバクシャたち

核の棄民、憤怒の半世紀 仏 35

それでも原子力 チェルノブイリ 38

第三章 「原子カルネサンス」の底流

封印されるイラクのウラン被害 40
見放されたロシア原潜爆発 43

米印ウラン村で相次ぐ「がん」 45
国際政治に影響を与える被爆者 48

イランの核にらむ湾岸諸国 55

韓国の原発輸出戦略 62

燃料サイクル 日本の野心 57

「民生用」に潜む抜け道 印 65

核燃料バンクに反発する途上国 59

核解体で協力する日米露 67

第四章 戦慄の核セキュリティー

四人の暴漢が難なく突破 南ア 73

脅威の芽摘む米の特殊作戦 81

オバマが監視する「緩い核」 75

「指紋」が切り札の核鑑識 83

核テロの「震源地」パキスタン 78

核テロに鈍感な日本 86